



# 田無神社

## 第46号

### 卯月

発行所  
田無神社社務所

〒188-0011  
東京都西東京市田無町3-7-4  
TEL 042-461-4442

編集発行人  
賀陽智之

#### お焚き上げについて

お焚き上げの場では、神社のものとお寺のものを分けて、神社の古札だけをお持ちいただくようお願いしている。これは、信仰の違いにより、お寺のものを神社で勝手に焚き上げることではない、という実務上の事情によるものである。

しかし、古札やお守りを持って来られる方々にとって、神社とお寺の違いは、必ずしも明確ではない。こちらが「お寺のものはお寺へお願いします」とお伝えすれば、多くの方は素直に「分かりました」と応じてくださる。けれども、その「分かった」は、厳密な宗教上の区別や教義上の差異を明晰に理解したというより、目の前の作業として分別にに応じてくださった、ということに近いだろう。むしろ、それで自然なのだと思う。日本で暮らす多くの人にとって、神社とお寺は、人々の暮らしに寄り添う場所として地続きに存在してきたからである。ただ、「そ

れぞれにお返しする場所があるのだな」と腑に落としてくださる。その受け止め方のなかに、私は理屈を超えた自然な信仰感覚を見る。

この感覚は、世界の宗教事情を思うと、なおさら興味深い。一宗教の世界では、信仰の違いが民族感情や歴史的対立と強く結びつき、容易に融和へ向かわない現実がある。イスラム教とユダヤ教をめぐる地域では、今なお深刻な戦争と暴力が続いている。もちろん、それらは単純に「宗教戦争」と呼べるものではない。本質には、政治や経済、領土や資源をめぐる権益争いがあり、宗教の違いは、ときにそれを正当化するための大義名分として利用されてしまう。信仰そのものが争いを生むというより、人間の欲望が信仰を道具にしてしまうのである。

だからこそ、宗教や信仰を政治や経済の道具にさせない努力が必要になる。その意味で、政教分離という考え方はきわめて理にかなっている。信仰を公権力から切り離すことは、宗教を

弱めるためではない。むしろ、宗教を政治利用から守り、本来の祈りや信仰の領域に立ち返らせるための知恵、だと言える。

多くの日本人が持つ感覚は、神仏和合の考え方に通じるものではないだろうか。人々の祈りの中で、神と仏をゆるやかに共存させてきた、柔らかな宗教観である。違いを消してしまうのではなく、違いを抱えたまま共にある。これは宗教観の対立をやわらげ、人々の暮らしを穏やかに支えてきた、日本ならではの精神文化の一つといえるだろう。違いを知ること、排すためではなく、敬意をもって向き合うための第一歩である。そうした思いから、お焚き上げの際には、神社のものとお寺のものを分けてお持ちいただきたい。



# 田無のもちつきうた・田無のぼうちうた

「もちつきうた」は、臼と杵で餅をつく際に歌われる歌です。「ぼうちうた」は、くるり棒と呼ばれる麦打ち棒で麦の穂をたたき、ノゲ（芒）を落とす作業の際に歌われた労働歌です。かつては夏の農家の軒先でよく聞かれたといいますが、現在ではその光景もほとんど見られなくなりました。

昭和45年（1970年）7月の津島神社祭礼において、「田無のもちつきうた」「田無のぼうちうた」が奉納された際、これを保存しようという声上がり、「ぼうちうたの会」が結成されました。

「ぼうち」「くるり棒」「とうみ」などの言葉が次第に忘れられていくなか、当時の農作業の様子や歌を正しく後世に伝えるため、祭礼の際にレコードへ録音した歌をもとに、当時田無市立第二中学校教諭で、のちに田無神社宮司となる賀陽瑞穂が採詞を行いました。採譜は、同じく田無市立第二中学校教諭の山本栄太郎氏が担当しました。

その後、昭和46年（1971年）11月3日、田無神社は「田無のもちつきうた」「田無のぼうちうた」

の歌詞と楽譜を収めた冊子を発行しました。



レコード

ここに、『読売新聞武蔵野版』昭和46年10月29日に掲載された記事を紹介します。

## ムギ打ち歌は残った

古老の声でレコードに田無で楽譜にもうつす

「田無の里のムギ打ちは腕骨が折れるか、ノゲが折れるか・・・」かつて真夏の炎天下、農家の庭先から流れてきた、素朴なムギ打ち歌が、ベッド・タ

ウンと化した武蔵野地区からいつの間にか消えた。この郷土の歌を、どうにかして残したい、というグループが、残り少なくなつたムギ打ち道具をそろえて、古老たちに歌ってもらい、興に乗ったナマの声の録音をする一方、器楽演奏もできるようにと、楽譜に写しとつた。この正調ムギ打ち歌は来月3日の「文化の日」にレコードとなつて、会員と希望者に配られる。

ムギ打ち歌。くるり棒と呼ばれるムギ打ち棒で、ムギの穂をたたきながら、そのトゲ（ノゲ）を落とすときの労働歌。

昨年の7月15日、同市の氏神である津島神社の祭礼に、はじめてこのムギ打ち歌をはじめ、モチつき歌など、むかしから伝わる田無の民謡が奉納された。結果はとても好評で、民謡を歌つた人々も「古い郷土の歌が忘れられて行く中で、ムギ打ちなどの仕事の様子や歌を正しく伝えられれば」と「ぼうちうたの会」をつくることになつた。会員は、田無神社の賀陽賢司宮司ら古老をふくめて13人。世話人に、賀陽宮司の長男、瑞穂さん

（田無市立二中教諭）があたることになつた。

賀陽さんは、まず、ムギ打ち歌を録音にとることにした。それも座敷ではなく、実際にムギを打つ労働の中でのものをと、いまでは残り少なくなつたムギ打ちの際の諸道具を、あちこちの農家からかき集め、録音の舞台はワラ屋根のある農家の庭先で行つた。威勢が出るようにと、ちよつとばかりお神酒もつけた。「田無の宿で機織れば、若い衆が窓から文を投げ込む」こんな色っぽい文句も古老の口からつぎつぎに出てくる見事な録音となつた。

賀陽さんは、この録音から、雑音や会話などを取り除いて、歌だけをレコードにすることにし、業者に依頼する一方、同僚の音楽担当、山本栄太郎教諭に頼んで、器楽用の楽譜に写してもらつた。山本教諭も「郷土の民謡が教材にできるならば」と喜んでこれに応じてくれた。こうして消える寸前に追い込まれていた郷土民謡のムギ打ち歌はどうやら持ち直し、現代つ子に伝えられる。



境内でもちつき



もちつき前の神事



もちのふるまい



もちつき前の神事



とうみで選別する様子



ぼうちの様子



ぼうちの様子



千歯扱きで脱穀

田無のもちつきうた

山本 栄太郎 採譜  
賀 陽 瑞 穂 採詩

Musical score for '田無のもちつきうた'. The score is written in bass clef with a 4/4 time signature. It consists of six staves of music with lyrics written below the notes. The lyrics are:   
メデ エ タ ナ - - - エ  
メデ ター メ デー ター ノエ -  
ワ カ - - - マ ツ サ - マ - エ -  
ニワ ニヤ ナ ナ - - - エ  
ニワ ニヤ ツ ルー カ - メ -  
ヤ レ - - - サ ゴ - ヨ ノ - マ - ツ -

田無のもちつきうた

- 一、目出度ナエ めでためてたの若松様よ  
庭にやな 庭にや 鶴亀ヤレサ五葉松
- 二、この家な この家やかたは めでたい館  
奥じゃ 三味ひく 中の間じゃ踊る お台所じゃ餅ついてさわぐ
- 三、おまえ百まで わしや九十九まで 供に白毛のはえるまで
- 四、私しゃな！ この事の火事場のまとい ふられながらもあつくなる
- 五、梅もいやだよ 桜もいやよ 桃と桃との間がよい
- 六、もちはねれたがこねどりやこない 早くこねどりくればよい
- 七、本町二丁目の糸やの娘 姉は二十一妹ははたち 姉にや少しものぞみはないが  
妹はしさに御願掛けて
- 八、伊勢へ七度び熊野へ三度 芝のあたごえ月まいり
- 九、松になりやた東海道の松に 諸国諸大名をヤレサ下に見る

田無のぼうちうた

山本栄太郎 採譜  
賀陽瑞穂 採詞



オマエ サント ナー ラバ ー ド コ マ デー モ  
タナ シノ シュー クデー ー ハ タ オ レー バ



オ ヤ オ スー テ コ ノ ヨ ガ ー ヤ ミ ニ  
ワ カ イ シュー ガ マ ド カ ラ ー フ ミ オ



ナー ル ト モ ー  
ナー ゲ コ ム ー

田無のぼうちうた

- 一、ぼた餅はやる世の中で おらがでは引割ばなの焼き餅（ノゲッポイノゲッポイ）
- 二、おまえさんは聞けばよそに妻 よそに妻あるならわたしやおいとま（ノゲッポイ）
- 三、おまえさんはいくつ何の年 十七でささぎの年でなりごろ（ノゲッポイ）
- 四、十七八はねむいころ井戸ばたで 米とき桶を枕に（ノゲッポイ）
- 五、声さえたてば歌えます わしの声春日の山の鹿の声（ノゲッポイ）
- 六、おてんと様の申し子で 六月の日照りに傘もかぶらず（ノゲッポイ）
- 七、照り降り曇り箱根山 晴れたとてお江戸が見えるではない（ノゲッポイ）
- 八、十七つれて瓜山へ 瓜の葉を寝ごさに瓜を枕に（ノゲッポイ）
- 九、お江戸ではやる八百屋さん八百屋さん 人参牛蒡に茗芽に生芽に竹の子（ノゲッポイ）
- 十、あの山影で鳴く鳥は 声もよし 音もよし 山の響で（ノゲッポイ）
- 十一、田無の星が思われて夜は夢 昼間は角に面影（ノゲッポイ）
- 十二、十七八の麦打ちは くるりの棒が折れるか ノゲが折れるか（ノゲッポイ）
- 十三、大山先に雲が出た あの雲がかれば 雨か 風か 嵐か（ノゲッポイ）
- 十四、歌ならございいくらでも 天の星河原の石の数ほど（ノゲッポイ）
- 十五、品川前のお地藏様 女郎町を眺めて ゆだれ三尺たらし（ノゲッポイ）
- 十六、田無の里の麦打ちは腕骨が折れるか ノゲが折れるか（ノゲッポイ）
- 十七、棒打ちの茶菓子は何がよい芋でよしさつまでよし あんころ餅ならなおよい（ノゲッポイ）
- 十八、田無の宿で機織れば 若い衆が窓から 文を投げこむ（ノゲッポイ）
- 十九、目出度ナ 目出度ナ 若松さまよ（ノゲッポイ）
- 二十、庭にナ 鶴亀あり 五葉のオー松（ノゲッポイ）

シリーズ

「尉殿考」第四回

田無神社 宮司 賀陽智之

尉殿の神格を特定し、その由来を理解しようとする試みは、明治初期の初代社掌(宮司)の賀陽濟、二代目社掌の賀陽尚賢の時代から続いてきました。筆者も可能な限り調査を重ねておりますが、現時点では決定的な資料の発見には至っていません。尉殿権現については、今後、論文等による学術的な研究の蓄積によって、さらに解明が進むことを期待しています。

令和4年(2022年)に刊行した御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』では、尉殿についてのさまざまな説・解釈を紹介し、垂迹神である俱利伽羅不動明王は雨をもたらず水の守護神、シナツヒコノミコト・シナトベノミコトは風雨の調和と五穀豊穡を司る神であることから、尉殿は水の神であると整理しました。その際、紙幅の都合により記載できなかった説・解釈については、社報において、「尉殿考」として紹介しています。

第1回では、昭和38年(1963年)に大國魂神社が刊行した『武蔵府中物語』の尉殿の記述を紹介しました。第2回では、昭和59年(1984年)に保谷市役所が刊行した『保谷市史別冊二保谷の石仏と石塔』における尉殿の記述を取り上げました。第3回では、平成18年(2006年)に刊行された片桐譲著『神と仏と村落共同体——宗教社会史の視座から——』を紹介しました。

今回の第4回では、昭和61年(1986年)に埼玉県神社庁が刊行した『埼玉の神社 入間・北埼玉・秩父』を紹介いたします。本書には、埼玉県加須市に鎮座する通殿神社の由緒などが記載されています。埼玉県を中心に、尉殿は「ジョードノ」「ズードノ」など、さまざまな呼称で伝えられています。本書ではその語源を蔵王権現に求めています。

通殿神社 つうでんじんしゃ  
(ごんげんさま)

加須市岡古井 二二四九  
(岡古井字反沼)

歴史

会の川左岸にある当地は、地名の由来伝承に、長暦3年、会

の川氾濫の大洪水で最初当地に流れ着いた不動明王は岡がふるえ(振動して)て取り上げられず、隣村の岡村(現不動岡)に至った話などが残る。

当社の創建は社伝によると、ある時この地を訪れた奥州の修験者が、水害に苦しむ村人の姿を見て、これを救済せんがため、一念発起して蔵王神社を勧請、社殿一字を建てたと伝えられている。また、古老の話に、社名は蔵王権現がザオウドノ、ゾウドノ、ズウドノ、通殿と次第に転訛したものともいう。現に「権現様」と呼ばれるのもそのためと思われる。

祭神の市杵島姫命は弁天であり、水の神・稲の神として信仰されている。

『風土記稿』によると村鎮守は天神社とされ、ほかに当社と八幡社・稲荷社・道祖神社があり、いずれも真言宗真如院持ちであった。

祀職については、神仏分離後、設楽、小磯、速水、荒木家と継いで奉仕し、現在に至っている。また、明治5年、当社は村社となり、同40年5月上地林一畝

二七歩を境内に編入した。

信仰

祭礼は、元旦祭・4月13日の春祭り・8月1日の名越祭・10月23日の秋祭りの年4回行われるが、目立った神事や行事を見ることがない。例えば近隣に見られるお獅子様や天王様の神輿を揉むといった男性的なものもすべて禁じられているのである。これは当社の祭神が温和な女神であるためと伝えられる。

かつて一度、天王様の神輿を作って練り歩いたところ、白い大蛇が突然現れ、田畑を荒らし、更には疫病がはやったともいわれ、それ以後、神輿は他所へ譲られ、前記二つの行事は一切行われない事になったと伝える。一説にその白蛇が神体であるともいう。

大祭は秋祭りとも呼ばれ、これが終わると稲刈りを始めるが、これは岡古井の祭りが終わらないと天気が定まらないといわれるからである。事実、祭り当日雨の降る事が多く、お参りに出掛ける時は洗濯物を取り込んでから行った方が良いといわれている。

シリーズ「神社と戦争」

第6回 第一次世界大戦

令和4年(2022年)に刊行された御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』は、田無神社の長い歴史を、貴重な写真や資料を通して振り返る構成となっております。なかでも第8章「神社と戦争」では、田無神社と戦争との関わりについて、当時の祝詞や関連資料を紹介しています。

本社報では、御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』に掲載された資料や、記念誌刊行後の倉庫調査によって新たに発見された資料を紹介いたします。また、終戦の日に当たる令和7年(2025年)8月15日に、田無神社が保管してきた戦争に関する歴史資料を「神社と戦争」としてWeb上で公開いたしました。これは、戦争の悲惨さと地域の歴史を、未来を担う世代に伝えていくことを目的とした取り組みです。戦争がもたらした悲しみや苦しみに向き合いながら、祈りを捧げ続けた人々の姿を今に伝えることは、平和の大切さを見つめ直すきっかけとなるはずです。田無神社が果

たしてきた役割、そして当時の人々の思いに、心を寄せていただきましたら幸いです。

第一次世界大戦は、大正3年(1914年)から大正7年(1918年)にかけて、連合国と、ドイツ帝国・オーストリア・ハンガリー帝国・オスマン帝国・ブルガリアの中央同盟国との間で行われた、ヨーロッパを主戦場とする大規模な戦争です。戦場はヨーロッパを中心としていましたが、その影響は世界各地に及びました。日本は、日英同盟を理由として、大正3年(1914年)8月23日にドイツに宣戦布告し、連合国側として参戦しました。これにより日本は、東アジアや南洋諸島におけるドイツの拠点に対する軍事行動を進めることとなります。第一次世界大戦は、日本を含む連合国側の勝利によって終結し、その戦後処理と新たな国際秩序の構築を協議するため、大正8年(1919年)1月にパリ講和会議が開かれました。この会議は、その後の国際関係を考えるうえでも重

要な転機となりました。

平成27年(2015年)発行の『写真で見るわがまち西東京―懐

「大戦にともなう需要の増大で、日本経済は、それまでの不景気から一転して「大戦景気」に沸いた。田無町でも、大戦景気の影響は、大正5年頃からすでにあらわれた。米価低落の続く前年までと打って変わって、米価も繭の価格も上昇を続けた。田無の行事への人手が増え、商売も盛んになり、春に小金井桜が満開になれば小金井橋が人で埋まるほどのにぎわいになった。物価の上昇は、大正4年の米価を100とすると、大正6年には156、大正7年には250にも跳ね上がった。こうした中、大正7年、富山県を発端とする米騒動が全国に拡大していった。東京でも日比谷公園の集会が暴動に発展し、軍隊が出動する事態が起きた。資料には残されていないが『保谷市史』によると、保谷村もなんらかの窮民対策がとられたと考えられる。田無町でも米騒動は見られなかったが、不正米商が横行し、田無警察署は白

かしのふるさと150年』には、田無町と第一次世界大戦に関する記述がありますので、ここに紹介いたします。

米商を臨検し、不正升の取り締まりを行った。大戦景気は終戦とともにしほみ、大正9年(1920)の春には終戦恐慌を迎える。不況は田無にもおよび、お盆の前日には、投げ売り価格の販売が行われ、それまでの好景気が嘘のように様変わりした。」

田無では、大戦後の景気低迷の中、鉄道への期待が高まっていった。南の甲武鉄道(現・JR中央線)や北の武蔵野鉄道(現・西武池袋線)のいずれにも遠く、「陸の孤島」となり、町の発展には鉄道の誘致が急務の課題となった。田無の重立連(地主)は、大正12年(1923)頃から、村山・小平・保谷・石神井・荻窪の各町村と西武鉄道の延長を働きかけた。

# ドイツ帝国との国交断絶と開戦奉告祭祝詞

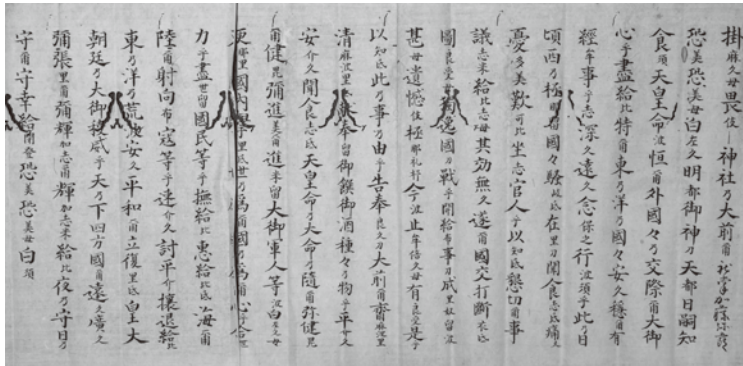
文中に具体的な祭典齋行の日付は記載されていませんが、「獨逸國刀戰爭開始布」とあることから、大正3年（1914年）8月23日のドイツ帝国への宣戦布告の直後に、この祝詞が奏上されたものと推察されます。

この祝詞では、東アジアの国々のことを「東乃洋乃國々」、ヨーロッパ諸国のことを「西乃極那留國々」と表現しており、地理的な認識を祝詞の中に織り込んでいる点が興味深いところです。

祝詞の前半では、ドイツ帝国との開戦に至る経緯が述べられています。「懇切爾事議志米給比志母其効無久」「甚母遺憾伎極那礼抒」とあるように、日本としては遺憾の極みであるものの、努力の甲斐なく、やむを得ず開戦に至った旨が説明されています。こうした表現からは、日本側が外交的努力を尽くしたうえで、なお開戦を避け得なかつた、という論理構成が示されていることが分かります。

すなわち、この祝詞は、戦意の鼓舞を主眼とするというよりも、まず開戦の経緯を神前に説明し、その正当性とやむを得ない事情を

申し述べる構成になっています。後半では、国民の安寧と東アジアの平和が祈願されています。史料として見ると、この祝詞は、戦時認識と神社との接点を考えるうえでも、示唆に富む内容を有しているといえるでしょう。

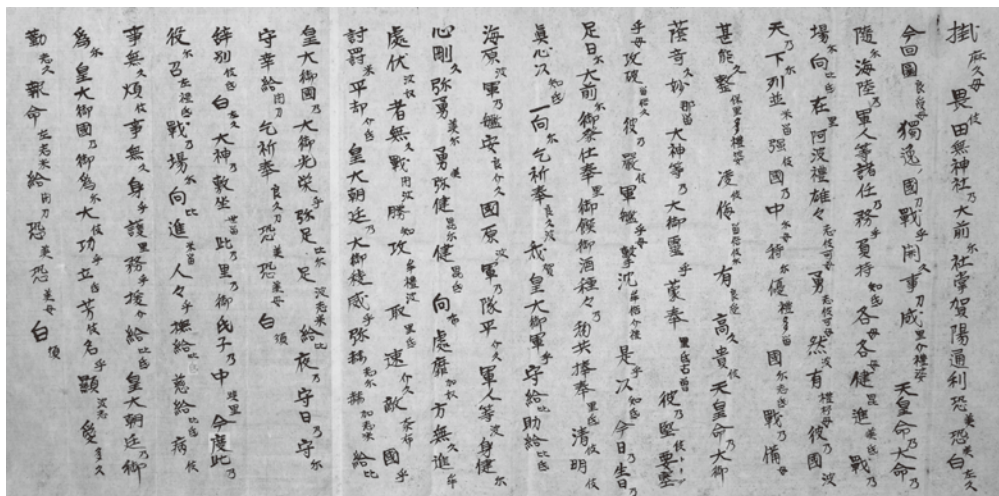


大正3年（1914年）の第一次世界大戦における日独戦争の戦勝祈願の祝詞と考えられます。大正3年8月23日、日本は連合国の一員としてドイツ帝国に宣戦布告しました。

文中にある「堅伎要塞」は、当時ドイツの租借地であった中国・青島に築かれていた青島要塞を指すとみられます。また、「嚴伎軍艦」は、ドイツ帝国東洋艦隊を指す表現と考えられます。いずれも、当時の日本が直面していた具体的な軍事目標・軍事的脅威を示す語であり、この祝詞が当時の国際情勢を反映していることがうかがえます。

祝詞の前半では、日本軍の勇敢さをたたえるところにも戦勝を祈願し、後半では、田無から出征した氏子の生命の安全、そして無事の帰国を祈念しています。

# 日独戦役祝詞



## 青島の戦い風刺画

こちらは、大正4年（1915年）1月1日に、時事新報社（現・産経新聞社）が発行していた『時事新報』の付録として刊行されたものと考えられます。新年号の付録として、当時の戦況や世相を反映した時代の空気を伝える印刷物です。

画面には、日本軍人（左の立像）とイギリス軍人（右の立像）が並んで立ち、その前に倒れたドイツ軍人の人形が描かれています。さらに左下には、退却するドイツ軍人の半身も表現されており、構図全体として、連合国側の勝利とドイツ側の敗走を強く印象づける内容となっています。人物の配置や動きにも明確な意図が見られ、当時の人々にとって分かりやすい「勝利の図像」として制作されたものといえるでしょう。

日本軍は宣戦布告後、イギリス軍と共同して、当時ドイツの租借地であった青島の拠点を攻撃しています。この青島攻略戦は、大正3年（1914年）10月31日から11月7日にかけて行われ、日本・イギリス連合軍が勝利を収めました。本資料は、そうした戦果を背

景に制作されたものとみられ、当時の対独戦勝の受け止め方を視覚

的に示しています。

また、紙面に見える「勝った！勝った！」という印象的なフレーズからも、当時の戦勝を寿ぐ社会の雰囲気がよくうかがえます。単

なる報道資料というだけでなく、戦時下における大衆感情やメディア表現のあり方を伝える点でも、この一面は貴重な史料といえるでしょう。



！たつ勝！たつ勝

時事新報 大正四年一月一日

### 平和克復奉告祭

祝詞の表書きには、大正9年(1920年)9月9日と記されています。日独戦争は、第一次世界大戦の一環として大正3年(1914年)に始まり、大正7年(1918年)に戦闘自体は終結しました。ただし、祝詞文中に見える「五年乃永伎年月」という表現からは、単に戦闘の終結時点ではなく、戦後処理を含めた一連の経過を念頭に置いていることがうかがえます。とくに、大正8年(1919年)にヴェルサイユ条約が締結され、国際的に正式な講和が成立したことを踏まえた表現とみるのが自然でしょう。すなわち、この祝詞における「五年」は、開戦から講和成立までの期間を指してい

るものと考えられます。このことから本祝詞は、大正9年(1920年)、すなわち講和成立の翌年あたり、長く続いた戦乱がようやく収まり、戦後の国際秩序が整えられつつある状況に神前に奉告したものと理解できます。あわせて、戦後における世界の安定と、今後の永続的な平和の実現を祈願する内容です。

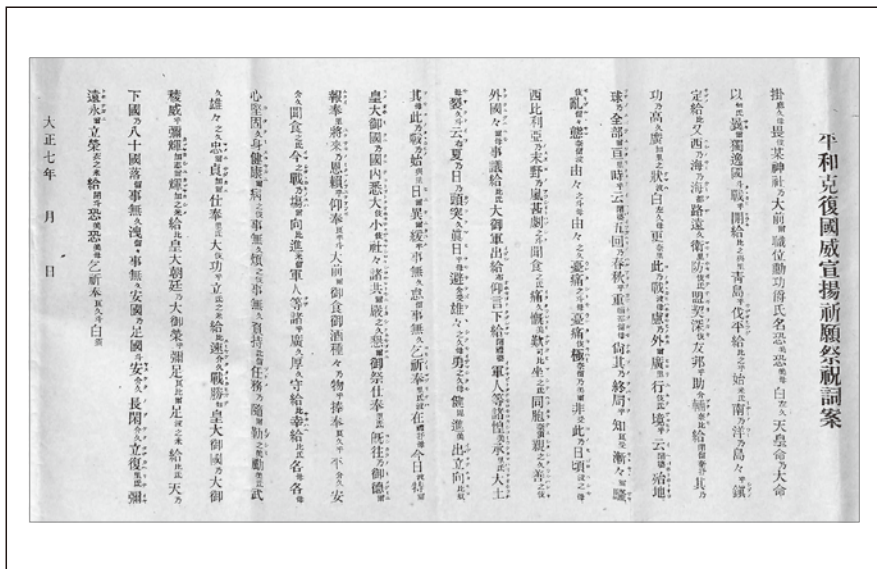


### 平和克復國威宣揚祈願祭祝詞案

大正7年(1918年)、日本は連合国の一員として、ロシア革命に対する干渉戦争の一環としてシベリア出兵を行いました。本祝詞案は、大正3年(1914年)の青島の戦いや南洋諸島での戦勝に触れつつ、なお世界各地で戦いが続いている状況を憂えた内容となっております。そのうえで、シベリアへ出征する兵士たちの安全を願いながら、戦勝による国威の発揚と平和の克復を祈願しています。

また、表現面にも特徴があり、開戦から5年が経過したことを「五回乃春秋呼重禰」と表し、暑い夏の日を「大土母裂久斗云布夏乃日乃頭突久眞日」と記すなど、修辭的な言い

回しが多く用いられています。こうした表現は、当時の祝詞文体の格調の高さを示すとともに、戦時下の緊張感を強く印象づけるものとなっております。







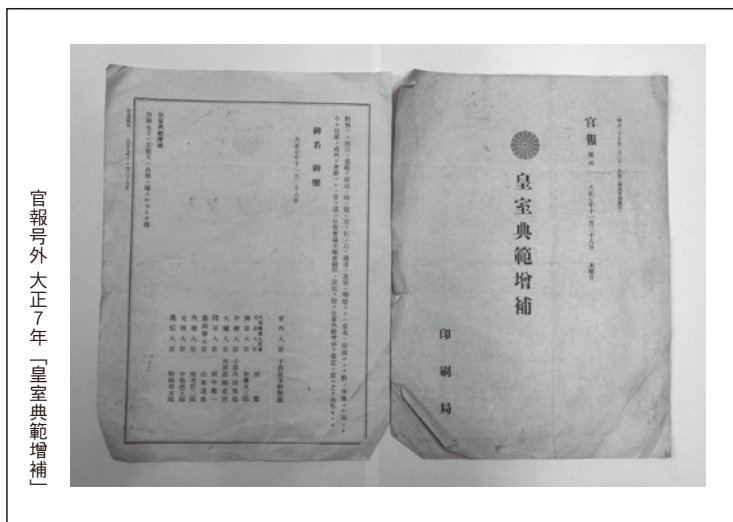
### 皇室典範増補

「官報号外（大正7年（1918年）11月28日）の皇室典範増補」は、旧皇室典範に1条を追加した増（増）補で、要点は「皇族女子ハ王族又ハ公族ニ嫁スルコトヲ得」という規定です。つまり、皇族女子が「王族・公族」に嫁ぐことを可能にする内容でした。のちに昭和22年（1947年）の新しい皇室典範で廃止されています。

臣籍降下に関する規定を整備したもので、皇族の範囲や身分に関する制度が、より具体的に定められました。戦後は、日本国憲法の施行に伴い、旧皇室典範は廃止されました。これに代わり、昭和22年（1947年）に現行の皇室典範が制定されました。

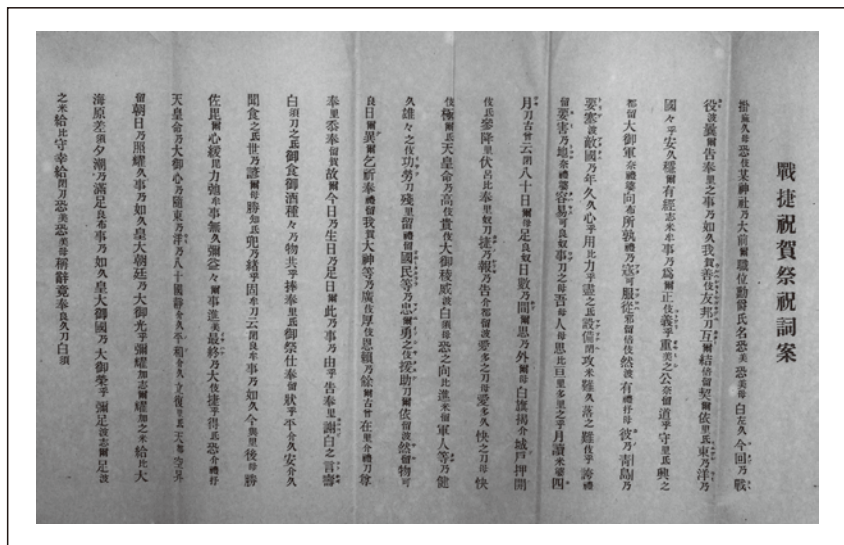
参考までに、旧皇室典範（明治22年2月11日制定）は、近代国家としての日本における皇室制度の基本を定めた規範です。大日本帝国憲法の発布と同日に制定されました。

明治40年（1907年）2月11日の皇室典範増補は、主として皇族の



官報号外 大正7年「皇室典範増補」

本資料は、「戦捷祝賀祭祝詞案」と題された祝詞の案文であり、大正3年（1914年）の青島攻略戦の勝利を祝して奏上されたものです。文中には、青島攻略戦における具体的な情景を思いさせる表現が見られ、当時の戦況認識や、戦勝を国家的慶事として受け止めていた世相をよく伝えていきます。たとえば、「東乃洋乃國々呼安久穩爾有経志米牟事乃為爾」とあり、この戦争の目的を、東洋の諸国の平和を保つための正義の戦いとして位置づけています。



### 戦捷祝賀祭祝詞案

にもかかわらず、実際には80日足らずで白旗を掲げさせることができた、と記されています。こうした記述からは、当時の戦勝に対する強い誇りと昂揚感を読み取ることができます。

# 龍神池レポート

## 生命が宿るビオトープ

### 第14回「モツゴの地域名」

昨年11月、ビオトープの冬の生き物調査を行いました。調査のためにタモ網を入れてみると、体長5cmを超える、比較的大きなモツゴが見つかりました。おそらく、龍神池の中では最大級の生き物です。

池が整備されて今年で8年になります。このモツゴも、もしかすると池の歴史の半分ほどを過ごしてきたのかもしれない。そう思うと、小さな魚ながら、龍神池の移り変わりを見守ってきた古株のように感じられます。

モツゴは、関東地方以西に広く分布する身近な淡水魚ですが、地域によってさまざまな呼び名で親しまれてきました。その数は、なんと70種類以上ともいわれています。ひとつの魚にこれほど多くの名前があることから、昔から人々の暮らしの近くにいた魚であることがうかがえます。

ビオトープの調査では、こうした生き物との出会いを通して、身

近な自然の豊かさや、地域の環境の変化をあらためて知ることができます。これからも季節ごとの調査を続けながら、龍神池に息づく小さな命の営みを見守っていきたいと思います。

その一部を、少し紹介してみましよう。

- ・クチボソ（関東・中部地方など）
  - ・イケノテムムキ（和歌山県）
  - ・セイグロウ（新潟県）
  - ・ヤナギバヤ（群馬県）
  - ・モロ（静岡県）
  - ・アブラブナ（長野県）
  - ・オボソ（茨城県）
  - ・ジャモロコ（京都府）
  - ・アマサギ（富山県）
  - ・タカツチロ（福岡県）
- これほど多くの名前があるのは、モツゴが古くから各地の水辺で愛されてきた証なのです。これからも地域の自然を大切に、皆様から親しまれる生きもの豊かな池になるよう見守っていきます。

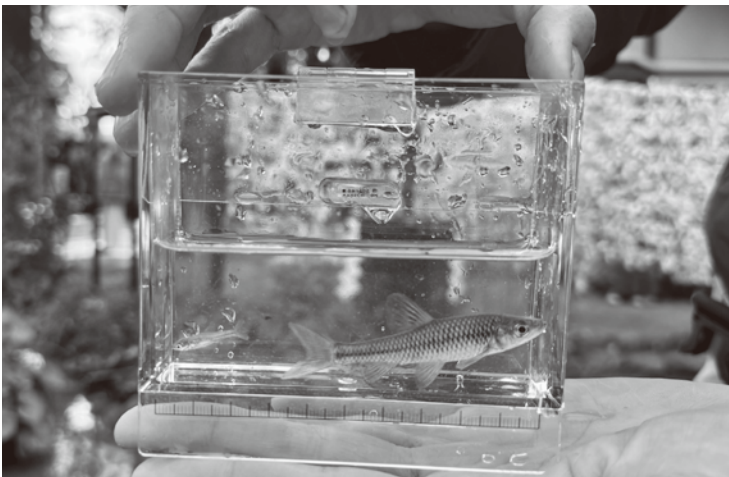
調査・監修 NPO birth



池の調査



池の調査



モツゴ

#### ◎ 今回の調査で見つかった主な生きもの

モツゴ	クロシギンヤンマ 【幼虫】	シオカトンボ 【幼虫】	ヒメタニシ	アイノコイトモ

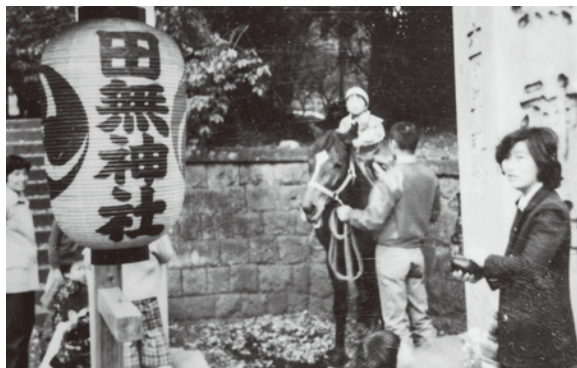
※六マークは生きもののレア度を表しています。☆3が最高ランクになります。

写真でめぐる  
田無神社の記録

長年にわたり大切に所蔵・保存されてきた写真を、ここに紹介いたします。今回は、御遷座三五〇年記念誌『写真と資料から見る田無神社』において、紙幅の都合により掲載できなかった写真17点をご紹介します。また、昨年末より、田無神社公式HPでも明治・大正・昭和期の境内や祭礼の様子を順次ご紹介しておりますので、あわせてご覧ください。



昭和17年5月22日



昭和53年11月15日



昭和55年7月15日



年代不明(酉の市)



年代不明(参集殿北側)



年代不明(地鎮祭)



昭和40年代(社殿)



年代不明(焚き上げ神事)



年代不明(参集殿西側の市道)



年代不明(社殿内で酉の市の準備)



年代不明(階段上の工事)



昭和50年代(節分祭)



昭和50年代(社殿内)



年代不明(選挙当選祈願)



年代不明(右に野分初稻荷が写る)

神社からのお知らせ

春の茶会

4月12日(日)に、西東京市茶道華道文化協会主催の「春の茶会」が開催されます。

和室席は国登録有形文化財である参集殿に、野点席は舞殿に設けられ、毎年多くの来場者で賑わいます。うらかな春の風に包まれる境内で、ゆったりとお茶席をお楽しみいただけます。

榛名祭と春季大祭

4月15日(水)に、神社総代参列のもと、田無神社兼務社である尉殿神社において午後1時より榛名祭を、天神社において午後2時より春季例大祭を斎行いたします。

天まで届け鯉のぼり

鯉のぼりの設置期間は、4月21日(火)から5月7日(木)までです。田無神社の境内には、春の爽やかな薫風が吹き込み、その風に乘って鯉のぼりが気持ちよさそうにたなびきます。なお、安全対策のため、ヒノキ製の鯉のぼりの竿は例年より短くしております。大きく美しい鯉のぼりを、ぜひお子様

やお孫様と一緒にご覧ください。

五穀豊穣春祭・雹祭斎行

責任役員並びに氏子総代参列のもと、4月末に田無神社社殿において五穀豊穣春祭・雹祭を斎行いたします。

雹祭は、正式名称を「五穀豊穣春祭・雹祭」と改め、毎年、総代会において祭日を決定しております。祭典では、五穀豊穣祭祝詞および氷雨祭祝詞を奏上いたします。

雹祭の起源については、明治41年(1908年)および昭和10年(1935年)に発生した大規模な雹害のいづれかを契機とする、二つの説が伝えられています。

雹や風雨による災いがなく、作物が豊かに実ることを願い、五穀豊穣を祈念するお祭りです。

バケツ稲作り

農業協同組合(JAグループ)よりご提供いただいた「バケツ稲作りセット」を、下記のとおり配布いたします。

セット内容は、種籾・肥料・栽培マニュアル・お名前シールです。収穫された稲は、例大祭の稲受け取り期間中に田無神社までご奉納ください。お預かりした稲は、お神輿にくくりつけてお供えいた

します。

配布期間

4月25日(土)より配布開始

受け取り期間

10月1日(木)～10月9日(金)

端午祭と菖蒲

端午の節句に際し、5月4日(月)に端午前日祭を斎行し、邪気を祓う菖蒲を祓物として待合殿の屋根に投げ入れます。端午祭は、翌5月5日(火)午後4時より社殿にて斎行いたします。穢れや邪気を祓い、お子様の健やかな成長を祈念いたします。



わんぱく相撲西東京場所

5月17日(日)、田無神社にて

わんぱく相撲西東京場所が開催されます。

参加する子どもたちは、例年約300名にのぼり、境内は多くの来場者で賑わいます。各学年で優勝したわんぱく力士たちは、6月に開催される東京都大会へ出場いたします。温かいご声援を、どうぞよろしく願っています。

わんぱく相撲は、青年会議所の主催により開催されており、子どもたちが日本の国技である相撲を通して、心身の鍛錬と健康の増進を図ることを主な目的としています。

ランドセル祈願のご案内

ランドセルお祓い式は、新入学を神様にご報告し、通学時の安全と学業成就を祈願するお祭りです。入園・入学は、お子様にとって人生の大切な節目です。6年間背負うランドセルや通園バッグをお祓いし、すがすがしい気持ちで新しい門出を迎えましょう。

ご予約は不要ですので、当日直接社務所へお越しください。

期間

4月～5月中

持ち物

午前9時～午後4時  
ランドセルまたは通園カバン

冬の祭典



鎮火祭



師走大祓式



節分追儺祭



節分祭の獅子舞



初午祭



紀元祭



祈年祭



天長祭